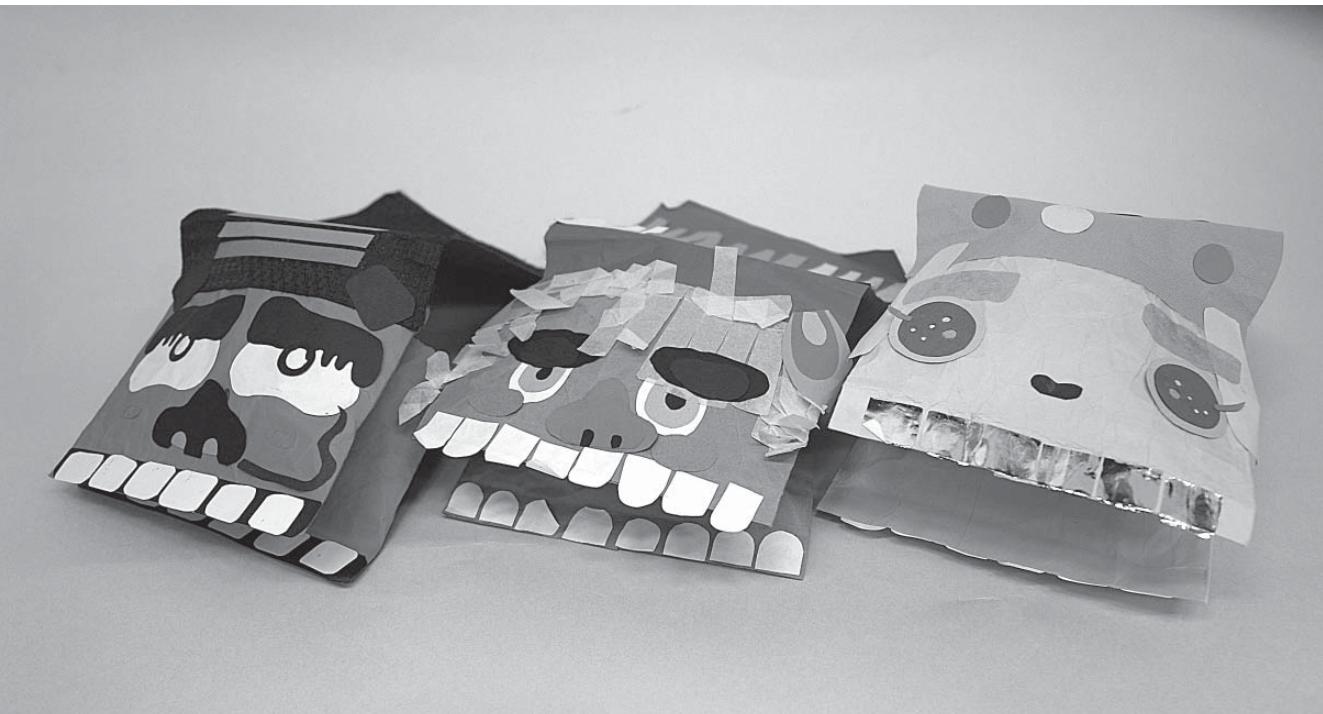


作って遊ぶ “紙”の造形

造形遊びには、いろいろな楽しみ方があります。さまざまな材料を使って、その材料がもっている特質を生かして造形するだけでなく、作ったものをみんなに見てもらう、作ったものでみんなで遊ぶ、みんなで力をあわせて共同制作をするなど、自分以外の人（他者）とのかかわりを広げるきっかけにする楽しみ方もあります。“紙”を素材にした、作ったもので遊べる造形プログラムを紹介します。



造形遊び

「パクパクししまい」（お正月）

西洋紙は、表面に平滑度があると同時に、張りがあって強いものです。造形活動で、一般的に使われる色ラシャ紙（色画用紙）も西洋紙なので、同じ性質を持っています。

ふつうは、じわのないピンとした状態で使いますが、プログラムによっては、紙そのものに手を加えることもあります。色ラシャ紙を、両手を使ってゆっくりと破けないように静かに揉んでゆくと、紙の表面にちりめんのような細かいじわがよって、和紙のような柔らかい表情の色紙ができます。

柔らかい調子にかえることで、立体的な造形表現がしやすくなります。素材に手を加えてみることで、素材の新しい可能性を見い出すことができます。

造形遊びは、作って終わりではありません。色ラシャ紙をもんで柔らかくなつたかどうか、できあがつた獅子頭の下あごに親指を、上あごに他の指を入れて実際に動かしてみます。紙なのに、布のような感触になっているのに驚かされます。

一人で遊ぶのも良いのですが、ダンボールなどでちょっとした書き割りの舞台を作つておくと、人形遊びの世界が広がります。子どもたちはより積極的に、自分で作った「パクパクししまい」で遊びます。BGMがあれば、みんなで音楽にあわせて踊ることもできます。

柔らかくした紙を使って、「お正月」の季節行事にちなんだ造形遊びのプログラムを考えました。「パクパクししまい」です。

季節行事は、昔から生活のなかでつちかわれてきた文化なので、大人も子どももよく知っています。行事で使われるもの、行事に関連したものごとなど、共通するイメージを持っています。

季節行事を造形プログラムに取り入れようとするとき、「何をつくろうか」「どのように表現するか」と悩む人も多いと思います。大人も子どもも、ともにイメージするものを考えると、これらの悩みを乗り越えることができます。

「パクパクししまい」は、お正月「ししまい」という連想から生まれました。「しし」の顔を作るのが難しそうに思えますが、年中行事の資料や地域の資料などを参考にして考えます。調べた資料とそっくり同じにする必要はありません。まねをして、独自の「しし」を作ればよいのです。

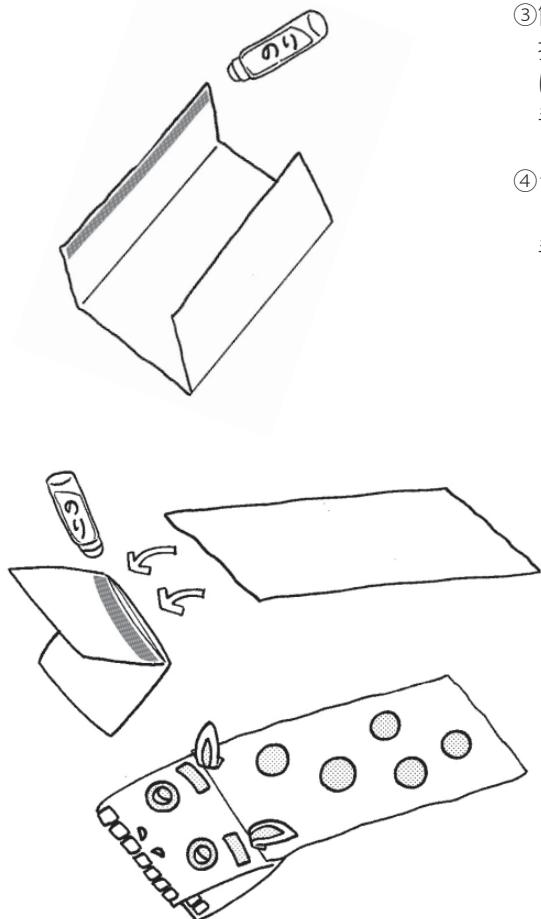
作品を作つて、完成させることができるもの活動の着地点ではなく、作ったものを活用し、遊ぶというところまでが、造形遊びのプログラムになります。自分で作ったもので遊ぶということは、作ったものへの愛着をはぐくみます。造形する喜び、楽しみをより深めていくことができます。

自分が作ったもので多くの友だちと遊ぶことは、自分以外の人（他者）が表現したものにふれる大切な場になります。「パクパクししまい」をとおしたコミュニケーションで、互いを理解し認めあうことになります。

□「パクパクししまい」の作り方□

①大小のラシャ紙を、破らないようによくもんで、柔らかくします。
大きいラシャ紙は獅子頭、小さいラシャ紙はマントになります。

②大きいラシャ紙で、獅子頭を作ります。
長い方の辺を1cmぐらいの幅で張り合わせ、筒状にします。



⑦開口部（切り込み）から手を差し込んで、
ぱくぱく動かして遊びます。
机や台などを利用してステージを作り、
背景などを準備すれば、パペットシアターにもなります。

□「パクパクししまい」作りで使う道具□

はさみ／のり／水性マーカー

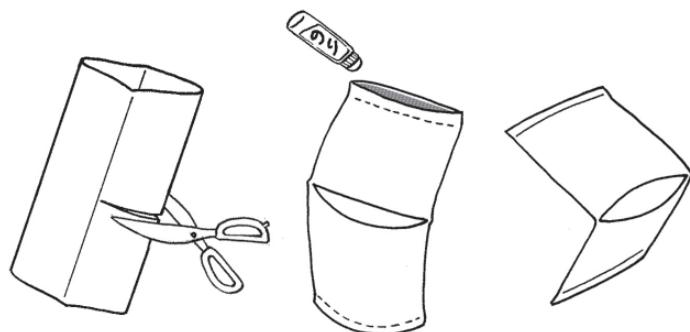
□「パクパクししまい」の材料□

- ①獅子頭用のラシャ紙1枚 (B5判～A4判)
- ②マント用のラシャ紙1枚 (14×17cm)
- ③飾り用のいろいろな紙

③筒状になったラシャ紙を二つ折りにします。

折り目のところの、上のラシャ紙だけ、
はさみで切り込みを入れます。
手を差し込むための開口部です。

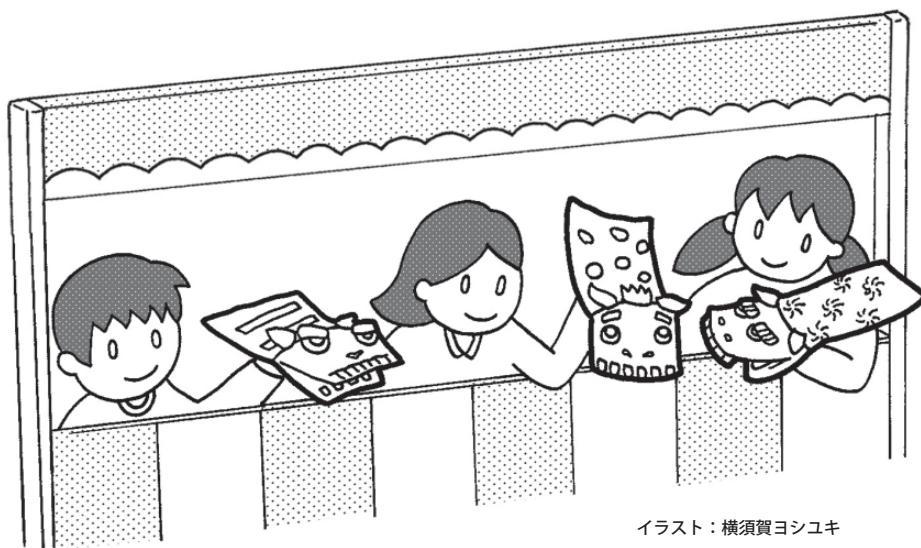
④ラシャ紙の開いているところ（2か所）を
1cmぐらいの幅で折り曲げ、のり付けします。
手を差し込むことができる、紙袋状のものができます。



⑤開口部から1cmぐらい離したところに、
柔らかくもんだ小さいラシャ紙をのり付けします。
マントです。
マントを上にして、手を差し込みます。
差し込んだ手の甲の外側部分が顔になります。

⑥マーカーで描いたり、いろいろな紙をはったりして、
“しし”的顔を作ります。

※ラシャ紙の好みには、決まりや法則はありません。いろいろな方法で、紙をもむ感触や手触りの変化を楽しみながら、紙が破れないように柔らかくなるまでもんでもください。
布のような感触になります。



イラスト：横須賀ヨシユキ